

授精課通信



そんな人達が農場の抱えている問題点を農場主と共有し「一緒に解決する方法を模索しよう」と提案した時どういことが起きるでしょうか。

～問題の共有と目標の共有～

前回のマネジメント情報で、『目標の共有』について書かせていただきました。それとセットでお伝えしたいのは、『問題の共有』です。現状の問題点について、従業員さんや関係業者の方と情報共有出来ていますか？

◎現状の問題点を知ることで...

毎日農場で仕事をする従業員さんや毎日農場に出入りする例えば授精師さん。毎日何気なく日々の仕事をしていると思います。毎日農場にいるということは、些細な変化や異変に気付くチャンスがあるということだと私は思います。また、外部の人は他の農場も見ている為、違った視点で農場のことを見ることができる可能性もあります。

- 沢山の人の目が原因探しに向けられる
- 日常業務+αで「原因ってなんだろ？」と他の事も観察するようになる⇒観察する癖が付き、他の異変も見つかるようになるかも！
- モチベーション UP！につながる⇒日常業務以外のことで、一緒にどうにかして欲しいことをお願いされるのは、「必要とされている」と感じることができるので、その人のやる気につながってくるかもしれません(個人差あり)

☆目標の共有や順調に行っている話と違って、現状の問題点についての話をするのは、難しいものかもしれません。ですが、それがきっかけで解決やいい方向に動き出す可能性もあると思います。

THBS 通信



「白毛交雑種」ブランドに

足寄・北十勝ファーム 仏原産と和種かけ合わせ

～新聞に載りました～

以前、THMS でシャロレーについての取り組みを紹介させていただきましたが、先日シャロレーの肥育をしてくださっている北十勝ファームさんが道新に紹介されそこで、シャロレーとまだみなさんには紹介していない『シャロレーと和牛の交雑種(弊社内での通称:和ロレー)』を紹介していただきました。
※道新 2.19 より転載



足寄町の北十勝ファームで肥育されている畜産的にも珍しい「白毛交雑種」

道内外飲食店に出荷へ

【足寄】町内で肉牛の日本短角種を生産する北十勝ファーム(中田種社長)は、希少なフランス原産の白毛のシャロレー種と黒毛和種を掛け合わせた肉牛のブランド化に取り組んでいる。ホルスタインと和牛の交雑種(和ロレー)は一般的だが、脂肪の少ない赤身肉が特長のシャロレー種と黒毛和種の組み合わせは全国的にも珍しい。外見は白毛だが、中身は黒毛に近い味わいというユニークな「白毛交雑種」として販売したいと考えた。

(岡田圭史)

同ファームは、日本短角種約600頭、シャロレー種約10頭を飼育。国産飼料を使用し、「安心・安全の肉牛」にこだわっているが、新型コロナウイルス感染拡大で取引先からの需要は減少。全国でこの地牛が誕生するなど、肉牛を取り巻く競争環境も激化している。こうした年に合わせ、個性的なこの地牛で差別化を図ろうと、シャロレー種の供給で提携している根室管内別海のトータルハードマネージメントサービス(佐竹直紀社長)と2019年春から「白毛交雑種プロジェクト」(仮称)に取り組んでいる。

同社は獣医師や人工授精師など、畜産的にも珍しい「白毛交雑種」

个性的ご当地牛で差別化

師でつくると酪農コンサルティング会社、プロジェクトでは、雌のシャロレー種から卵子を採取し、シャロレー上に培養して成熟させた後、雄の黒毛和種の精子を加えて授精させた。さらに1週間ほど培養した体外受精卵をホルスタイン種の子宮内に移植して妊娠させた。第一号は19年秋に誕生し、現在は同ファームで肥育中。年内にも道内の焼き肉店に出荷する予定。

また、交雑の逆の組み合わせとして、雌の黒毛和種の卵子に雄のシャロレー種の精子を加えた体外受精卵の培養も進めている。肉質や味などの評価を踏まえ、飼料の配合なども変えながらブランド化に向けた独自の品質基準をつくる。

上田社長は市場価格の変動に左右されない相対取引で道内外の飲食店に販売していく考えで、「100頭体制を目指し、首都圏の高級レストランにも売り込みたい」と力を込める。

佐竹社長は「交雑種は病気に抵抗もあり、成長も早い。産地や消費者にとって魅力ある肉牛になってほしい」と話している。

移植で使用する1mlシリンジに「滅菌済」と書かれていることが気になったので滅菌について調べてみました。

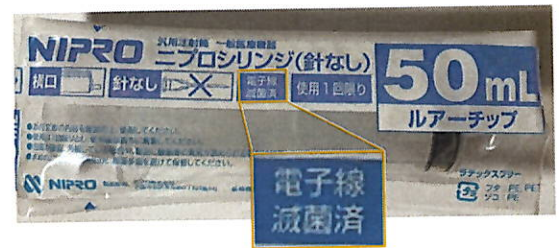
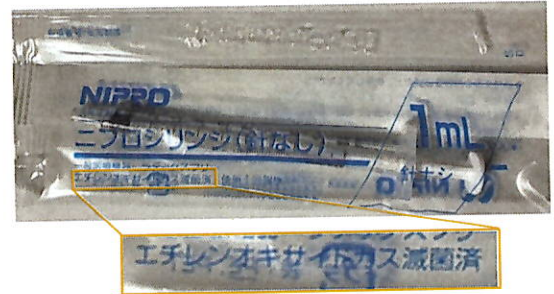
「滅菌」の定義

「滅菌」とは、有害・無害を問わず対象物に存在しているすべての微生物及びウイルスなどを殺滅または除去すること。

日本薬局方では「微生物の生存する確率が100万分の1以下になること」をもって、滅菌と定義しているそうです。

普段、我々が行う人工授精は、無菌の子宮内に異物である注入器を入れて、授精します。子宮内の感染を防ぐため、器具の滅菌と消毒が必須で、子宮粘膜に傷をつけないことが大切になってきます。

人工授精で使用するシース管も滅菌されています。



滅菌の種類

「火炎滅菌」

火炎（1000℃以上）を用いて全ての微生物を焼却。不燃性の実験用具の滅菌。

「乾燥滅菌」

160～200℃の乾燥空気を直接又は間接的に一定時間対象物にあて、全ての微生物を破壊。ガラス製品などの検査、保存器材等の滅菌。

「高圧蒸気滅菌」(オートクレーブ)

高温・高圧の蒸気で全ての微生物を殺滅。実験用具などを滅菌。

「エチレンオキサイドガス滅菌」

過熱に耐えられないプラスチック製の器材を対象にエチレンオキサイドガスで全ての微生物を殺滅します。

シース管や移植に使う1mlシリンジはこの方法で滅菌されています。

「電子線滅菌」

過熱不可でガスを通さない包装物を対象に電子線で全ての微生物を殺滅します。

シリンジ・注射針・シャーレ・培養器など